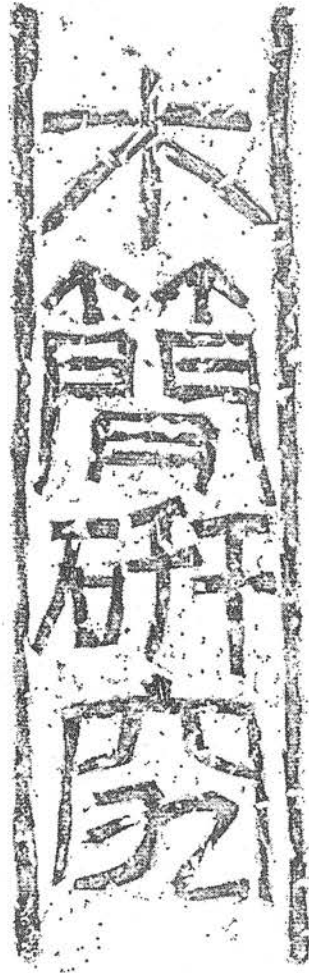


木簡研究

第一五号

木簡研究

第一五号



木
簡
学
会

題字
藤枝
晃刻

目次

巻頭言……………早川庄八…………… i

一九九二年出土の木簡…………… 1

概要	西山良平	1	京都・勝龍寺城跡	岩崎誠	45
凡例	5	京都・平安京跡・旧二条城跡	土橋誠	47	
奈良・平城京跡	森公章	8	京都・鳥羽離宮跡	会下和宏	49
奈良・平城京左京三条三坊三坪	原田憲二郎	11	大阪・大坂城跡	積山洋・黒田慶一・清水和	53
奈良・平城京右京三条二坊三坪	西崎卓哉	20	大阪・大坂城下町跡	鳥居信子・豆谷浩之	53
奈良・藤原宮跡	橋本義則	22	大阪・喜連東遺跡	松尾信裕・積山洋・清水和	56
奈良・藤原京右京五条四坊	竹田政敬・和田萃	26	大阪・植附遺跡	伊藤純・鳥居信子・豆谷浩之	63
奈良・丹切遺跡	柳澤一宏	34	大阪・平野環濠都市遺跡	佐藤隆・久保和士	63
京都・長岡京跡(1)	山中章・松崎俊郎・秋山浩三	36	大阪・植附遺跡	中西克宏・菅原章太	67
京都・長岡京跡(2)	國下多美樹・清水みき	36	兵庫・袴狭遺跡(内田地区)	小寺誠	69
京都・中海道遺跡	秋山浩三・清水みき	44	滋賀・鴨田遺跡	北村圭弘	72

三重・六大B遺跡	中村光司	73	新潟・八幡林遺跡	田中靖	101
三重・安養寺跡	大西素行	75	新潟・綾ノ前遺跡	金子正典	104
三重・宮の西遺跡	春日井恒	77	新潟・馬場天神腰遺跡	品田高志	106
三重・赤堀城跡	花井千幸	78	石川・乾遺跡	藤田邦雄	108
静岡・梶子遺跡	鈴木敏則・鬼頭清明	79	石川・宮永ほじ川遺跡	木田清	109
岐阜・城之内遺跡	内堀信雄	83	富山・北高木遺跡	安念幹倫	111
山梨・二本柳遺跡	小林健二	85	広島・山崎遺跡	河野龍彦	113
群馬・二之宮宮東遺跡	坂井隆・高島英之	88	徳島・中島田遺跡	山下知之	116
群馬・安養寺森西遺跡	飯田陽一	91	愛媛・久米窪田森元遺跡	西尾幸則	117
群馬・世良田諏訪下遺跡	三浦京子	93	福岡・観世音寺跡(南門跡)	倉住靖彦	119
福島・小茶円遺跡	吉田生哉	95	福岡・脇道遺跡	井上信正	120
福島・番匠地遺跡	矢島敬之	97	佐賀・城原三本谷南遺跡	桑原幸則	122
宮城・瑞巖寺境内遺跡	新野一浩	99	宮崎・妻北小学校敷地内遺跡	近藤協	132

一九七七年以前出土の木簡(一五)……………

福井・一乗谷朝倉氏遺跡(第九次)	佐藤圭	133	京都・長岡宮跡(宮第三一・三三三次)	清水みき	142
広島・草戸千軒町遺跡(第五・六・八次)	下津間康夫	137			

凡 例

一、以下の原稿は各木簡出土地の発掘機関・担当者に依頼して、執筆していただいたものであるが、体裁および積文の記載形式等については編集担当の責任において調整した。

一、遺跡の配列はほぼ奈良時代の五畿七道の順序に準じた。

一、積文の漢字はおおむね現行常用字体に改めたが、「實」「證」

「龍」「廣」「盡」「應」等については正字体を使用し、異体字は

「井」「井」「季」「躰」等についてのみ使用した。

一、積文下段のアラビア数字は木簡の長さ（文字の方向）・幅・厚さを示す（単位はミリメートル）。欠損している場合は括弧つきで示した。その下の三桁の数字は型式番号を示す。またそれぞれの発掘機関での木簡の通し番号は最下段に示した。

一、積文に加えた符号は次の通りである（六頁第1図参照）。

「┌」 木簡の上端ならびに下端が原形をとどめていることを示す（端とは木目方向の上下両端をいう）。

< 木簡の上端・下端に切り込みのあることを示す。

×× 抹消された文字であるが、字画のあきらかな場合に限り原字の左傍に付した。

○ 穿孔のあることを示す。

■ 抹消により判読困難なもの。

□□□ 欠損文字のうち字数の確認できるもの。

□□□ 欠損文字のうち字数が推定できるもの。

□□□ 欠損文字のうち字数の数えられないもの。

× 前後に文字のつづくことが内容上推定されるが、折損等により文字が失われているもの。

『』 異筆、追筆。

┌ 合点。

・ 木簡の表裏に文字のある場合、その区別を示す。

〔 〕 校訂に関する注で、原則として積文の右傍に付し、

本文に置き換えるべき文字を含む場合。

〔×〕 文字の上に重書して原字を訂正している場合、訂正

箇所左傍に・を付し原字を上を要領で右傍に示した。

カ 筆者・編者が加えた注で疑問の残るもの。

マ、 文字に疑問はないが意味の通じ難いもの。

… 同一木簡と推定されるが、折損等により直接つなが

らず、中間の文字が不明なもの。

|| 組版の関係で一行のものを二行以上に組まなければ

ならなかった場合、行末・行初につけたもの。

* 図版に写真の掲載されているもの。

一、地形図は原則として国土地理院発行の五万分の一地形図を使用し図名を（ ）内に示した。地図中の▼は木簡の出土地点を示す。

一、積文の最下段に三桁で示した型式番号は、木簡の形態を示し、つぎの一五型式からなる（七頁第2図参照）。

011型式 短冊型。

015型式 短冊型で、側面に孔を穿ったもの。

019型式 一端が方頭で他端は折損・腐蝕で原形が失われたもの。

021型式 小形矩形のもの。

022型式 小形矩形の材の一端を圭頭にしたもの。

031型式 長方形の材の両端の左右に切り込みをいれたもの。方頭・圭頭など種々の作り方がある。

032型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいれたもの。

033型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいれ、他端を尖らせたもの。

038型式 長方形の材の一端の左右に切り込みがあるが、他端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。

051型式 長方形の材の一端を尖らせたもの。

052型式 長方形の材の一端を尖らせたものであるが、他端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。

055型式 用途の明瞭な木製品に墨書のあるもの。

061型式 用途未詳の木製品に墨書のあるもの。

081型式 折損、腐蝕その他によって原形の判明しないもの。

091型式 削屑。

広島・草戸千軒町遺跡出土木簡の型式番号は、広島県草戸千軒

町遺跡調査研究所『草戸千軒―木簡一―』を参照されたい。なおその他の中・近世木簡については以上の型式番号に適合しないものが多いので、注記を省略したものもある。

位下財掠人安万呂
行夜使仍注状故移

×位下財掠人安万呂
×行夜使仍注状故移

泉進上材十二条中 又八条×

〔武蔵国男衾郡余戸里大贄鼓一斗天平十八年十一月〕

請飯藏部一人 舍人十七人
史生一人 右依例所請如件

請飯藏部一人 舍人十七人
史生一人 右依例所請如件

〔請飯藏部一人 舍人十七人
史生一人 右依例所請如件〕

第1図 木簡積文の表記法

奈良・平城京跡

- 1 所在地 奈良市北新町
- 2 調査期間 一九九二年(平4)七月～八月、二一九九二年一〇月、三一九九二年一月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部
- 4 調査担当者 代表 町田 章
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

一 第二三〇次調査

駐車場造成に伴う発掘調査で、平城宮の南に接する左京三条一坊十・十五・十六坪にかかる地域である。四本のトレンチを設定して計約一七〇〇㎡を調査した。

その結果、十五・十六坪の間には三条条間小路が存在せず、両坪が奈良時代を通じて一体の敷地として利用されたことが明らかになった。但し、両坪の間には東西中軸線上に門を開く築地塀があり、南北二つの区画に分けて利用されていたと見られる。十五坪の中心部では、三棟の大型東西棟建物の東西に南北棟建物を配するという、京内の宅地だけでなく、宮内でも例を見ない配置が奈良時代を通じ

て続いている。これらはいずれも当初の掘立柱建物を後に礎石建物に建て替えている。また十六坪では二間×七間の身舎の四面に庇が付く極めて格の高い建物が建てられ、京内では最大規模の井戸SE〇六が設けられている。SE〇六は一辺が約一・八mの蒸籠組の井戸で、従来京内で最大であった長屋王邸の井戸SE四五八〇の一辺一・三五mよりはるかに大きい。横板は七段(一段の高さは二四・五×二六・〇cm)が現存する。深さは約三mである。掘形および井戸枠内埋土出土の土器の年代から、奈良時代後半に掘られ、長岡遷都以後に廃絶したものと考えられる。なお、井戸枠内埋土から奈良時代末期の軒丸瓦も出土しており、その他、木製品としては齋串・曲物がある。

一方、十坪と十五坪の間では、東一坊坊間東小路を検出しており、十坪は十五・十六坪とは別の区画であったことが明らかになった。十坪東辺では井戸SE三六を検出している。SE三六は、一辺が約六mの隅丸方形の掘形をもち、枠木は全て抜き取られ、土坑状を呈する。井戸枠抜取穴からは平城宮出土土器編年のⅡ期(七一六～七三〇年頃)の土器が出土している。

木簡は井戸SE〇六の井戸枠内から一点、井戸SE三六の抜取穴から五点が出土した。

十五・十六坪は、その建物配置だけでなく、宮内の埴積み基壇官衙と同一型式の軒瓦が全軒瓦の四分の一を占めること、埴が多数出

土していること、「内匠寮」という官司名の書かれた木簡が出土したことなど、遺物の点でも個人の邸宅とは考えにくく、宮外官衙の可能性が高い。一方、十坪については、「宅」と書かれた木簡が出土したことから見ても、個人の邸宅の可能性がある。

二 第二三〇九次調査

駐車場造成に伴う発掘調査で、5m×2.0mの東西トレンチを設定して調査を行ない、左京三条一坊十六坪東側の東一坊大路西側溝SD三九三五、および十六坪東端の区画施設の東雨落溝を検出した。

木簡は東一坊大路西側溝SD三九三五から出土した。SD三九三五は、約5m分を検出し、幅は検出面で6m、底で4m、深さ1.6mの断面逆台形の溝で、西岸に四〇～五〇cm大の河原石による護岸を持つ。埋土は上から暗灰褐色砂質土・暗灰色粘質土・暗褐色粘質土・暗灰色バラス土の四層に分かれる。木簡の出土は暗褐色粘質土層から一点、暗灰色バラス土層から七点（うち三点は削屑）の計八点である。共伴遺物としては、金製飾金具断片、和同開珎六點、神功開宝一点、帯金具四點、海老鏡一点、鉄釘二点などがあり、また護岸石列の南端で籌木と思われる木製品がまとまって出土している。最下層の暗灰色バラス土層からも奈良時代後半の土器が出土しており、東一坊大路西側溝は奈良時代を通じて溝としての機能を保っていたものと考えられる。

三 第二三四一〇次調査

駐車場造成に伴う発掘調査で、九〇㎡を調査した。位置は左京三条一坊十坪の西南部にあたる。奈良時代の蛇行する流路SD〇一（幅四～六m、深さ二m）、これと重複する井戸SE〇二などを検出した。SE〇二は、井戸掘形は九五cmの方形で、内側に八枚前後の薄い縦板を立てている。井戸底から須恵器横瓶・広口壺や籠状編物などとともに木簡七点が出土した。木簡はいずれも削屑である。SE〇二は遺物から細かい年代を限定できないが、SD〇一下層堆積のある時点で造られ、その上層と同時に廃絶している。SD〇一下層からは内面に放射暗文とらせん暗文をつける土師器杯Aが出土しており、平城ⅡからⅢ期（七三〇～七五〇年頃）の早い段階まで流路として使用されたようである。上層からは土師器椀Aが出土しており、平城Ⅲ期の中段階以降のある時点で埋められたものと考えられる。

8 木簡の積文・内容

一 第二三〇次調査

井戸SE〇六

(1) 「内匠寮」
〔匠カ〕

(61)×17×2 019*

井戸SE三六

(2) ・ ×枝宅車二両

〔赤染カ〕
□年六月廿一日□□□

(159)×33×7 081*

(3) <蓮子壺斗>

(221)×23×2 031*

二 第二三四―九次調査

東一坊大路西側溝SD三九三五

(1) ・池万呂 □女



(36)×(10)×2 081

(1)は暗褐色粘質土層から出土したものである。人名を記すが、内容は不明である。

三 第二三四―一〇次調査

井戸SE02

(1) 西嶋

091

(2) 西

091

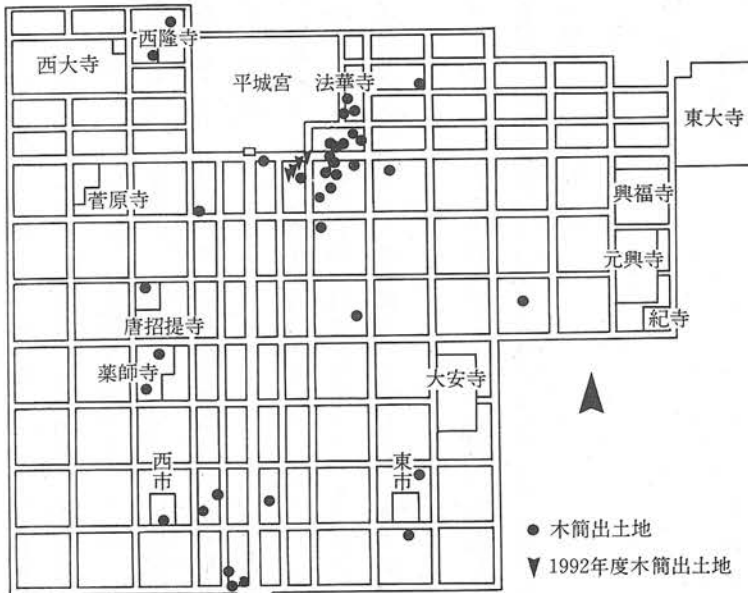
左京三条一坊十坪は平安京では神泉苑の位置にあたる。その位置で奈良時代の蛇行流路を検出し、池の存在を示唆する「西嶋」の木簡が出土したことは注目に値する。但し、一―(2)のように、某宅の存在を推定させる木簡も出土しており、今後左京三条一坊十坪の性格を検討していかねばならないであろう。

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報』二七（一九九三年）

同『一九九二年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』（一九九三年）

（森 公章）



平城京木簡出土地点図



(奈良)

柿経を中心とする大量の

路と思われる。
旧河道は当時の佐保川の流
遺構が失われていた。この
の河道により、それ以前の
半は、中・近世の南北方向
木杭列がある。発掘区の西
井戸一基、中・近世の土塼
掘立柱建物六棟、土坑三基
一画にあたる。検出した遺構には、弥生時代の溝一条、奈良時代の

- 1 所在地 奈良市大宮町七丁目
- 2 調査期間 一九九二年(平4)四月～五月
- 3 発掘機関 奈良市教育委員会
- 4 調査担当者 松浦五輪美・原田憲二郎
- 5 遺跡の種類 都城跡・河道跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代～桃山時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

奈良・平城京左京三条三坊三坪

木簡は旧河道内と、その氾濫による砂層から出土した。今回の調査地の北西約一二〇mの地点でも、やはり河川の氾濫と思われる砂層から一九七四年に一万点近い柿経・笹塔婆等が出土しており(奈良国立文化財研究所『平城京左京三条三坊』一九七五年)、同じ佐保川の旧河道とみることができる。

8 木簡の积文・内容

- (1) 「親近便作是念仏道長遠久受勤苦乃可得」
- ・「是□来方便之力□一仏乘分別説□如□
彼」
267×24×0.3 061
- (2) 「□□入仏道慎勿懷驚懼譬如險惡道廻絶多毒獸」
- ・「□□生死煩惱諸險道故以方便力為息設涅槃」
264×24×0.3 061
- (3) 「常説無上道故号为普明其国土清浄菩薩×」
- ・「我今乃知实是菩薩得授阿耨多羅三藐□」
(183)×22×0.3 061
- (4) 「漢道書諸有漏於深禪定皆得自在具×」
- ・「釈坐処若梵天王坐処若転輪聖王× (159)×23×0.3 061
- (5) 「藐三菩提復有八世界微塵数衆×」
- ・「遍於九方衆宝香爐燒無価香自然× (132)×21×0.3 061

(22) □□□□□□□□淨仏国土不久得成無

・「者」 (239)×(18)×0.3 061

(23) ・「者」□□□□垢濁水莫染不受塵

・「者」 (227)×24×0.3 061

(24) ・「者」□□□□我等今頓乏□□□□退還導師作是念此

|| 輩甚可愍 三廿八 ||

・「者」 (293)×24×0.3 061

(25) ・「者」□□□□常說無上道故号為普明其国土清淨苦

|| 薩皆勇猛 ||

・「者」 (286)×23×0.3 061

(26) ・「者」□□□□如是無量事我今但略說

・「者」 (286)×23×0.3 061

(27) ・「者」□□□□入不為一切邪見生死之所壞敗是故善男

・「者」 (295)×21×0.3 061

(28) ・「者」□□□□得入無上道速成就仏身

・「者」 (296)×25×0.3 061

(29) ・「者」□□□□問其義趣是則為難若人說法令千万億

・「者」 (296)×23×0.3 061

(30) ・「者」□□□□由旬汝身第一端正百千万福光明殊妙

|| 是 ||

・「者」 (297)×22×0.3 061

(31) ・「者」□□□□汝是人以一切樂具施於四百万億阿僧祇

・「者」 (297)×23×0.3 061

(32) ・「者」□□□□不蒙仏所化常□□□□惡

・「者」 (135)×23×0.3 061

(33) ・「者」□□□□誦受持法華經者說陀

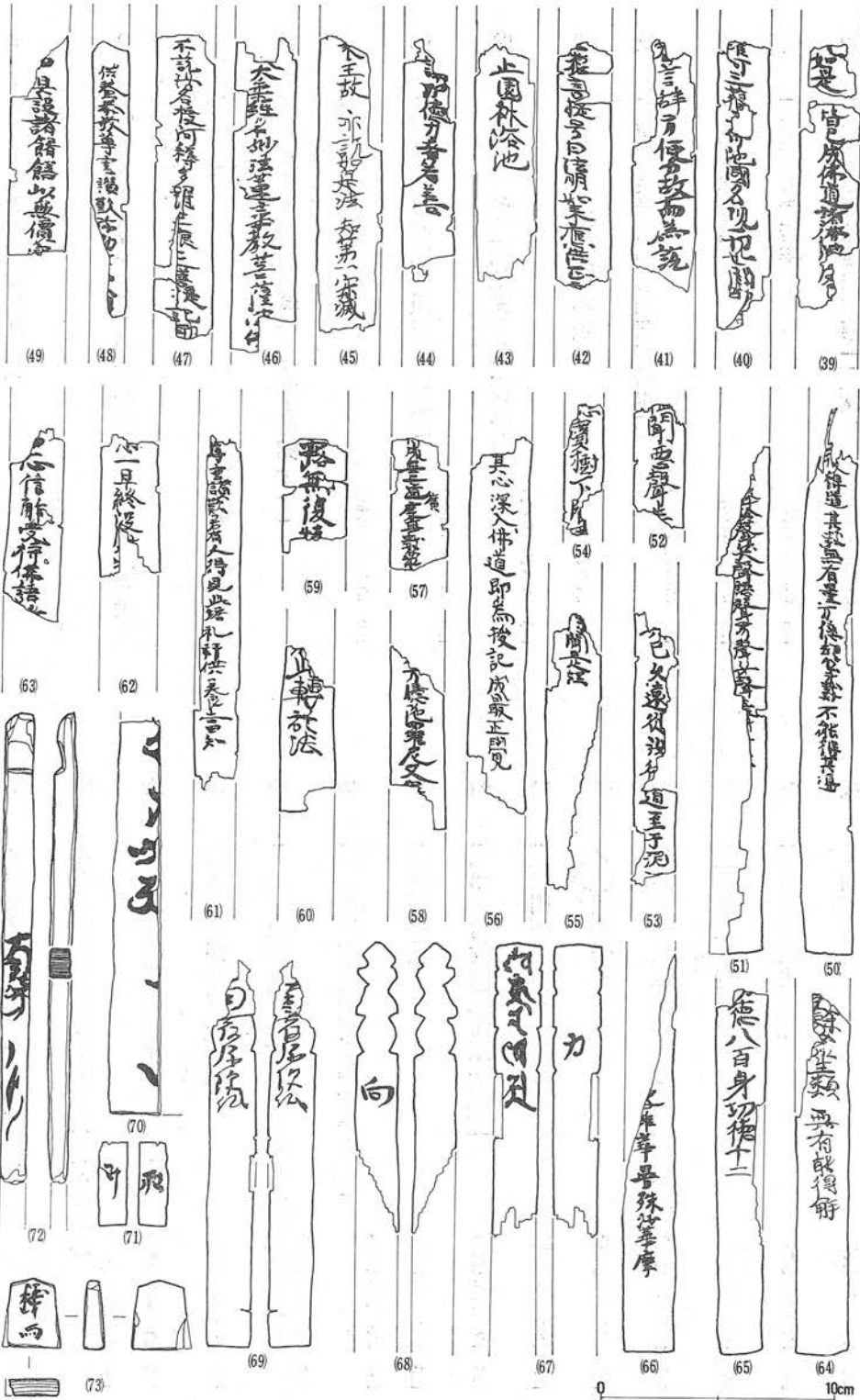
・「者」 (109)×24×0.3 061

(34) ・「者」□□□□菩薩声聞大衆南西北方四維□□如

・「者」 (247)×21×0.3 061

(35) ・「者」□□□□於無數劫如恒河沙生輒

・「者」 (159)×20×0.3 061



- (60) □此転於法 (72)×23×0.3 081
- (61) ×尊重讚歎若有人得見此塔礼拜供養当知 (154)×19×0.3 081
- (62) □一旦終□□ (60)×25×0.3 081
- (63) □心信解受持仏語□ (84)×24×0.3 081
- (64) □余衆生類無有能得解□ (154)×22×0.3 081
- (65) □徳八百身功德千二□ (158)×21×0.3 081
- (66) □華曼殊沙華摩□ (174)×23×0.3 081
- (67) ・「 $\overline{\text{阿}}\overline{\text{耨}}\overline{\text{多}}\overline{\text{羅}}\overline{\text{漢}}\overline{\text{羅}}$ 」
 ・「力」 (127)×19×0.3 081
- (68) 「向」 (126)×18×0.3 081
- (69) ・×南無阿弥陀仏□
 ・×南無阿弥陀仏□ (156)×19×0.3 081
- (70) □ $\overline{\text{阿}}\overline{\text{耨}}\overline{\text{多}}\overline{\text{羅}}\overline{\text{漢}}\overline{\text{羅}}$ □ (170)×(20)×5 019
- (71) ・「ウ」
 ・「取」 37×13×1 011

(72) 「南無阿弥陀仏」

(205)×13×10 065

(73) 「桂馬」

530×(25)×10 061

(1)～(66)は柿経、(67)～(69)は笹塔婆である。完形の柿経、笹塔婆は少なく、多くは細片であるが、約一万点が出土した。柿経は、檜や杉などの板を薄く剥いだ「こけら」あるいは「経木」と呼ばれる薄板に経文を書写したものである。今回出土した柿経は頭部形態と写経方法により、三種類に分類できる。各々の特徴を左に記す。

A-1類 頭部形態が山形で、表裏両面に経文を書写する。(1)～

(8)

A-2類 頭部形態が山形で、片面のみに経文を書写する。(9)～

(14)

B類 頭部形態が五輪塔形で、地輪部を下方にのぼし、五輪

塔部表面に「 $\overline{\text{阿}}\overline{\text{耨}}\overline{\text{多}}\overline{\text{羅}}\overline{\text{漢}}\overline{\text{羅}}$ 」の五大種字と経文、裏面には金剛界大日如来をあらわす梵字「 $\overline{\text{唵}}$ 」あるいは莊嚴点つきの「 $\overline{\text{唵}}$ 」を記す。(15)～(38)

書写經典の大半は法華経であるが、そのほかに無量義経、観音賢経、般若心経、阿弥陀経を書写したものが少数出土している。法華経書写柿経のなかには、(3)と(28)のように、経文の同一行が書写されているものがみられることから、二束以上の柿経があったことがわかる。断簡の所屬を左に記す。

妙法蓮華經序品第一	(21)・(46)・(48)・(66)
妙法蓮華經方便品第二	(15)・(36)・(41)・(45)・(57)・(63)・
妙法蓮華經譬喻品第三	(64)
妙法蓮華經信解品第四	(20)・(35)
妙法蓮華經藥草喻品第五	(13)・(62)
妙法蓮華經化城喻品第七	(12)・(18)・(56)
妙法蓮華經五百弟子受記品第八	(1)・(2)・(24)・(32)・(50)・(60)
妙法蓮華經法師品第十	(3)・(25)・(26)・(42)・(49)
妙法蓮華經見宝塔品第十一	(61)
妙法蓮華經勸持品第十三	(29)・(38)
妙法蓮華經安樂行品第十四	(8)の表・(10)・(47)
妙法蓮華經如來壽量品第十六	(7)・(8)の裏
妙法蓮華經分別功德品第十七	(28)・(59)
妙法蓮華經隨喜功德品第十八	(5)・(43)・(54)・(55)
妙法蓮華經法師功德品第十九	(4)・(31)
妙法蓮華經常不輕菩薩品第二十	(51)・(65)
妙法蓮華經如來神力品第二十一	(37)
妙法蓮華經妙音菩薩品第二十四	(16)
妙法蓮華經陀羅尼品第二十六	(30)・(40)
妙法蓮華經普賢菩薩勸發品第二十八	(14)・(33)
妙法蓮華經普賢菩薩勸發品第二十八	(6)

無量義經德行品第一 (23)

無量義經說法品第二 (27)・(58)

無量義經十功德品第三 (19)・(22)・(34)・(44)

仏説觀普賢菩薩行法經 (52)

出典不明 (9)・(11)・(17)・(39)・(53)

柿經の書写は、限定された時間内で完了させなければならなかったので、間違えて書写されている柿經も多い。今回出土した柿經でも、誤字(1)の裏の末字)、加字(1)の裏の「彼」、57の「廣」、抹消(33)が見られる。

今回出土した柿經は、両面写経のものと片面写経のもの両方があり、厚さは薄く、均一化していることなどから、柿經の年代は一五〜一六世紀後半であろう。

笹塔婆は、柿經と同じように、薄板に名号、題目、種字などを書写したものである。今回出土した笹塔婆は、頭部を山形にしたものと、五輪塔形のもの二種類に分類できるが、頭部を山形にし、「南無阿弥陀仏」の名号を記したものが大半である。

(70)は墨書札である。上部と右半分を欠損している。赤外線テレビカメラによる観察では「南無阿弥陀仏」の六字名号を、梵字で表記していることがわかる。(71)は聞香札もしくは鬪茶札である。表面の「ウ」は「客」の略字で、裏面の「取」は人名を略したものである。これまでの出土資料と比較すると、その形状から聞香札の可能

性が高い。(72)は墨書木製品である。上部に抉りが入っており、何らかの部材を再利用していると考えられる。(73)は将棋の駒である。文字を彫り込んで墨を点じたものではなく、そのまま墨書している。裏面に文字は確認できない。

なお、柿経の經典の検索に際しては、元興寺文化財研究所の藤澤典彦氏、千手寺の木下密運氏、木簡の釈読・解釈に際しては、奈良国立文化財研究所史料調査室の方々のご教示を得た。

9 関係文献

奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成四年度』(一九九三年)

松浦五輪美・原田憲二郎「柿経の考察―分類と編年について―」

『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 一九九二』一九九三年

(原田憲二郎)

奈良・平城京右京三条二坊三坪

- 1 所在地 奈良市菅原東町、宝来町
- 2 調査期間 一九九一年(平3)十一月～一九九二年六月
- 3 発掘機関 奈良市教育委員会
- 4 調査担当者 代表 小林謙一
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



現在の近鉄西大寺駅南の一带、平城京右京二条二坊から三条二坊に相当する地域で土地区画整理事業が計画されており、この事業に

関わって一九八八年(昭63)以来発掘調査を実施している。これまでに右京三条二坊で通算一四次、約三三〇〇m²の調査を行ない、現在は右京二条二坊で調査を続けている。今回報告の木簡は右京三条二坊三坪の調査(奈良市教育委員会第二三六

・二三六一二次調査)で出土した。

第三三六・二三六一二次調査は、二・三坪境の三条条間路に沿って三〇一〇m²の発掘区を設定し行なった。この地区では古墳時代から鎌倉時代まで各時代の遺構を検出しており、うち奈良時代の遺構は、条坊関係では三条条間路の一部とその南側溝、三・六坪境小路の一部とその西側溝、三坪内では三坪北辺の築地雨落溝、坪内通路、掘立柱建物三九棟、掘立柱塀一条、溝六条、井戸四基、土坑六基、土器埋納土坑一基である。調査範囲が三坪の北四分の一にとどまったので、坪全体の様相に言及することはできないが、検出した遺構には、重複関係や出土遺物から大きくA～Cの三時期の変遷があることがわかる。特にA、B期には坪の東西のほぼ中央に通路SF一〇七を設けて、坪内を東西に区画し利用している。通路の北端、三条条間路SF一〇一との交点に門が開かないことからSF一〇七は一つの宅地内での区画通路であると考えられ、三坪が相当規模の宅地であったことが推測できる。検出した建物がいずれも比較的小規模であることと、配置に綿密な計画性が見られないことから、宅地内の主要域は発掘区外南にあり、検出した遺構は三坪内の付属的な施設であると考えられる。

木簡はA期に属する井戸SE一一一から四点が出土した。SE一一一は一・八×二・三mの平面楕円形掘形に内法一・〇七mの方形縦板組横棧留の井戸枠を据えたもので、検出面からの深さ二・一m

である。枠内から木簡とともに土器と木製品、桃の種子が出土した。土器は奈良時代前半の特徴をもつもので、完形に近いものが多く量的にもまとまっており、一括投棄されたものと思われる。中に「殿」と墨書された土師器杯一点がある。木製品には斎串六点、刀形、陽物形、漆刷毛、漆篋、挽物椀があり、坪内での祭祀行為や漆工房の存在を示唆している。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「御米一斗六升五合 見充殿人食米一斗四合 〓

〓 一斗四升九合

328×22×4 0.11*

(2) ・「進上瓜二百卅七」^{〔顆カ〕}

・「八月十六日附鴨」^{〔手カ〕}

151×(13)×3 0.81*

(3) ・「謹進上」^{□□}

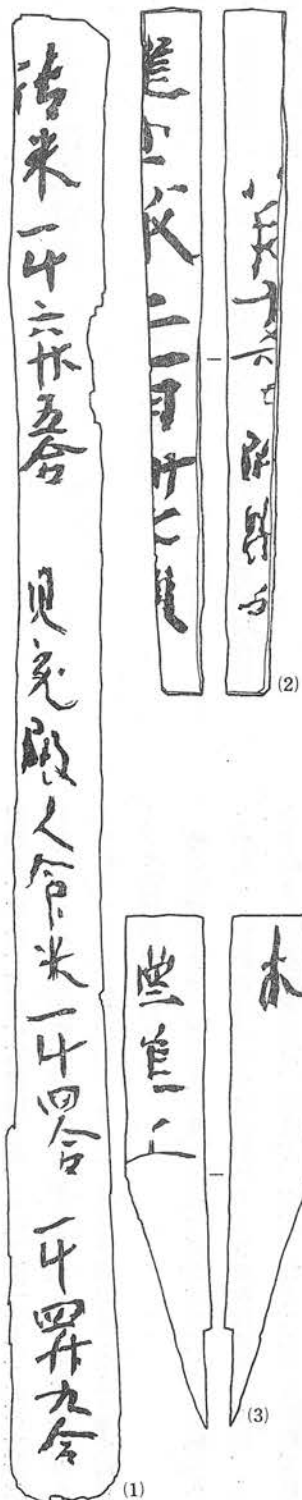
・「木工」^{□□□□}

(11)×(17)×1 0.81*

(1)は宅地内での米の支給に関わる木簡であろう。「御米」、「殿人」の記述が、三坪の住人と家政の運営とに関わって注意される。(2)は進上状である。(2)は宛先、差出の記述を欠くが、鴨[□]なる人物に瓜を託したとの意であるなら、三坪の住人某はその記述のみで差出を察知できたことになる。(3)は宛先の記述を欠き、進上の内容も不明である。木工某が差出したものか。他の一点は墨痕はあるが判読できない。木簡の釈読にあたり奈良国立文化財研究所館野和己氏のご教示を得た。

9 関係文献

奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成四年度』(一九九三年) (西崎卓哉)



奈良・丹切遺跡^{たんぎり}

- 1 所在地 奈良県宇陀郡榛原町大字萩原
- 2 調査期間 一九九二年(平4)四月～六月
- 3 発掘機関 榛原町教育委員会
- 4 調査担当者 柳澤一宏
- 5 遺跡の種類 遺物散布地
- 6 遺跡の年代 縄文時代後期～一四世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(桜井)

丹切遺跡は、榛原町の市街地南側に位置し、背後(南側)には丹切古墳群が広がっている。この遺跡の周辺は宇陀地域の交通の要衝ともなっており、大和と伊勢・伊賀、吉野などに通じている。

遺跡の立地は、宇陀川の河岸段丘とこれに接する丘陵南斜面の谷部分と丘陵部分にあたり、標高約三〇八～三五〇mで、南北約七～八〇〇m、東西約三～四〇

〇mが遺跡の範囲と推定される。

遺跡の東南部分において、民間業者による宅地造成工事が行なわれることとなったため、榛原町教育委員会が一九九二年度の受託事業として発掘調査を実施したもので、調査面積は約四五〇㎡である。発掘調査は、谷部とそれに隣接する尾根上をその対象地としており、谷部分では延長約二五〇m、幅約一五～三〇mの自然流路を検出し、その埋土内から弥生時代後期から中世にいたる各時期の遺物が出土した。なかでも下流部分において、その数量は多い。自然流路には護岸施設等は認められない。なお、自然流路周辺では、建物跡等の遺構は検出してはいない。

自然流路内からの出土遺物が大半を占め、整理用コンテナにして約二〇箱を数える。主な出土遺物として、サヌカイト片、瑪瑙片、弥生土器(壺・甕・高杯)、須恵器(杯・壺・甕・瓶)、土師器(皿・杯・碗・甕・土釜)、黒色土器(杯・皿・壺)、墨書土器、製塩土器、灰釉陶器(皿・壺)、瓦器(椀)、瓦、フイゴ羽口、銭貨(和同開珎・隆平永宝・寛平大宝)、鉄釘、鉄板、木製品(木簡・下駄・曲物ほか)、自然遺物(種子・馬骨)などがある。墨書土器(黒色土器・土師器)には、「□家」「子」「□井門」「□井」などと記されている。これらの遺物のうち、平安時代(九世紀後葉から一〇世紀中葉)のものが最も多く、木製品等はこの時期に含まれるものと考えられる。

木簡、墨書土器、和同開珎等の出土によって調査地周辺に何らか

の公的施設の存在も予想され、瓦葺建物、鍛冶工房等もあった可能性が高い。榛原町萩原を中心とする地域には、「萩原荘」があり、一〇世紀中葉には東大寺尊勝院領荘園であったことが『東大寺統要録』にみえ、丹切遺跡はこの荘園に含まれるものと考えられる。また、この遺跡は宇陀地域の交通の要衝に立地することから『日本書紀』壬申紀にある「菟田郡家」にかかわる遺跡とも推定できるが、今はまだ、これを明らかにできない。今後の検討を期したい。

8 木簡の釈文・内容

(1) ・「計□

□〔平カ〕

(46)×19×5 019

(1)は自然流路の埋土中より出土し、伴出土器から一〇世紀中葉以前に比定される。下半部分は焼失している。ほかに判読不能の短冊型木簡一点、墨画とも習書とも考えられる曲物の底板状の断片一点も自然流路内から出土している。

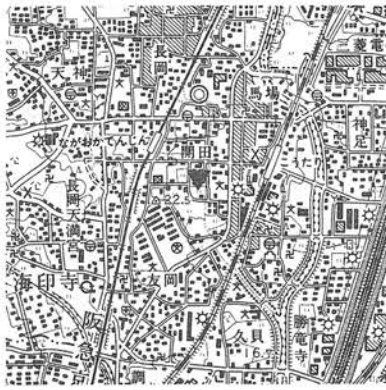
9 関係文献

榛原町教育委員会『榛原町埋蔵文化財発掘調査概要報告書 一九九二年度』(一九九三年)

(柳澤一宏)

京都・長岡京跡 (2)

- 1 所在地 京都市長岡京市開田四丁目
- 2 調査期間 一九九二年(平4)八月〜一〇月
- 3 発掘機関 長岡京市教育委員会
- 4 調査担当者 小田桐 淳
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 長岡京期(七八四〜七九四年)
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(京都西南部)

調査は長岡京跡右京第四一〇次調査として実施した。調査地は、阪急長岡天神駅とJR神足駅のほぼ中間に位置し、長岡京市内を南

流する大川の西隣りにあたる。地形的には大川の後背低地にあたるところで、調査対象地の三面の水田は東の大川に向かって順次低くなっている。ここは右京六条二坊五町の宅地推定地にあたる。同町内では今回が初めての調査である。

調査によって検出した遺構は、南北溝二条と東西小溝三条である。これらの溝のうち、五町のほぼ中央に位置する南北溝二条は一・六mを隔てて並行するが、時期差があると考えられる。このうち木簡が出土したのは南北溝SD四一〇〇五からである。

溝SD四一〇〇五は一〇mにわたって調査しているが、幅一・七mで深さが〇・三〜〇・五mの規模で、溝の西肩には長さ二・六m、幅一五cmの板材によって護岸施設が設けられていた。堆積土は砂と粘質土との互層からなっており、かなりの流水がうかがえる。これらの堆積土とは別に、一部で木製品を多く含む粘質土層が溝底にかけて堆積していた。木簡を含むほとんどの木製品はこの層から出土している。木簡以外では木履、斎串、人形、箸などがある。箸のなかには木簡を加工したものもある。

この層を押し流すように堆積している砂層からは多くの土器類が出土している。そのなかには「二」「大」「岡」「⊕」「□器」などの墨書やへら書き土器が含まれている。

8 木簡の积文・内容

(1) ・「謹啓 申」

右米五斗

・「誠石成」

米

(51)×(30)×4.5 081

(2) 「金銀」^{〔帳カ〕}

(88) × (30) × (4.5) 061

(1)は文書様木簡の断片で上下とも刀子によって斜に切れ目を入れて折られ、左端は割れている。表面は刀子によって削られて墨が部分的に薄くなっている。

内容は、表面は米を請求するものと考えられ、また裏面は検討を要するが、人名の可能性が考えられる。

(2)は左端が割れており、裏面は割り裂いたままで未調整である。右下端が切り込まれ、中央部に突出部があることから題籤になると考えられる。

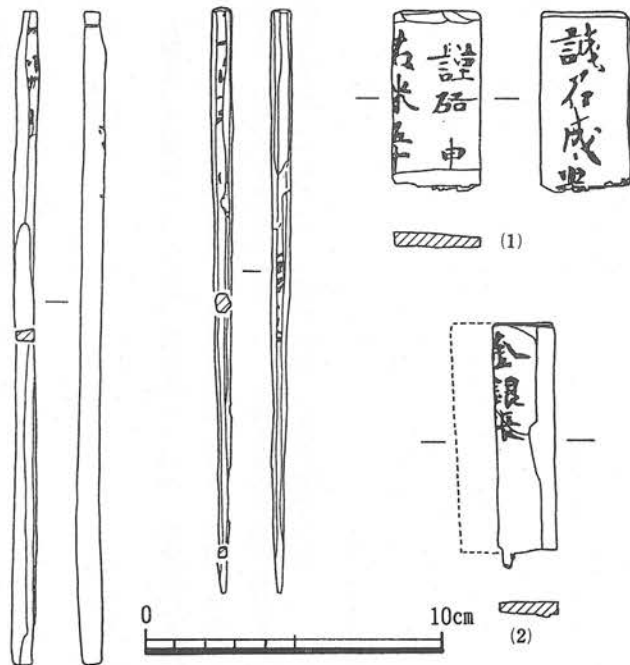
これ以外に箸状に二次加工されたもので、両者とも表裏に墨痕が認められるものが二点出土している。

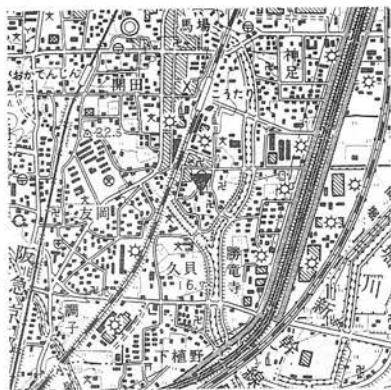
以上四点が出土した木簡であるが、(2)以外は二次的に加工されたものである。(2)の内容や(1)の木簡、木履などから金銀の出納に関係する役人が当町内にいたことが窺われる。

9 関係文献

小田桐 淳 「長岡京跡右京第410次調査概要」(長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』三一 一九九三年)

(小田桐 淳)





(京都西南部)

京都・勝龍寺城跡
しやうりゆうじじょう

- 1 所在地 京都府長岡京市勝竜寺
- 2 調査期間 一九八八年(昭63)五月～一九八九年(平1)三月
- 3 発掘機関 勅長岡京市埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 岩崎 誠・坂田孝彦
- 5 遺跡の種類 城郭跡
- 6 遺跡の年代 一三三九年～一五八二年頃
- 7 遺跡及び木筒出土遺構の概要

勝龍寺城は、山城三大河川の木津川・宇治川・桂川の合流点の北約二・五kmにある。立地は北からのびる段丘の先端部に位置し、標

高一三・五m前後を測る。当城の始まりは、南北朝期の暦応二年(一三三九)に細川頼春・師氏が築城したと伝えられる。また長祿元年(二四五七)以前に畠山義就が乙訓郡代役所として築城したとする説もあり、初現は明確でない。応仁の乱で

も度々文献に登場し、西軍畠山義就の支配下にあった。一六世紀中ごろには三好三人衆の一人岩成主税友道の居城となっていたが、永祿三年(一五六〇)に織田信長の支配下となり細川藤孝が城主となった。藤孝は元龜二年(一五七二)に勝龍寺城を再整備した。しかし天正九年(一五八一)に藤孝は宮津城に移り、翌年山崎の戦いで明智光秀軍の拠点として使われたが落城した。

今回の発掘調査は、勝龍寺城本丸・沼田丸の公園整備に伴い実施されたもので、細川藤孝再建時の土塁石垣や建物礎石、石組井戸、門、本丸や沼田丸を囲む堀、本丸内に築かれた堀やそれを渡るための橋脚などが検出された。出土遺物には、一六世紀後半の土師器、陶磁器、瓦、木器、漆器、金属器、墨書土器、瓦製土管や、石垣に組み込まれた石造物類などがある。

木筒の出土した遺構は、本丸内に掘られた四基の石組井戸の一つSE〇八である。この井戸からは、曲物底板や木片、土師器皿、国産陶器なども出土している。伴出した土器類から一六世紀後半の藤孝居城期に使用されていた井戸と考えられ、木筒も同時期のものと思われる。木筒は、ここに報告する一点だけであった。

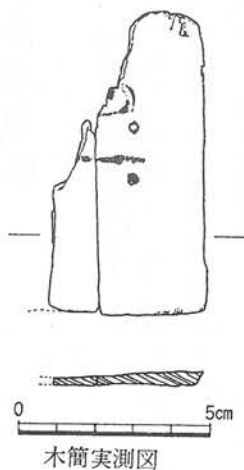
8 木筒の釈文・内容

(1)

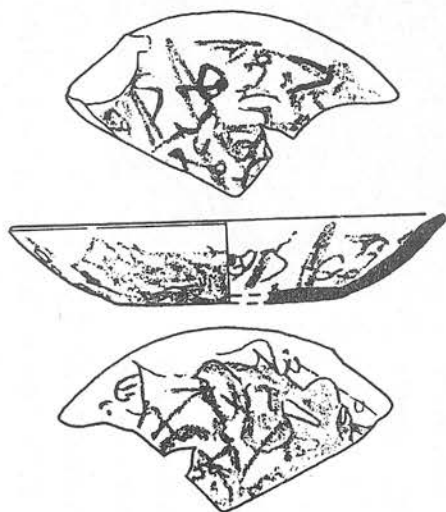


(81.5)×(41)×4 081

下端面と右側辺は切り技法により整形されている。左側辺と上部



木筒実測図



墨書土器実測図

は欠損している。板材は厚さ二mmから四mmの板目材を用いている。その片面に、直線と円状の墨痕がみられるが、意味は不明である。本丸の一六世紀遺物包含層から出土した墨書土器にも、意味不明の記号を描いたものがある。この土器も木筒同様に、ある規則性をもって描かれているように見受けられる。従って、落書きというよりも、呪文かそれに類する呪術・祭祀に使用した際に描かれたものではないかと思われる。

9 関係文献

〔長岡京市埋蔵文化財センター〕「勝龍寺城発掘調査報告」〔『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』六一九九一年〕

(岩崎 誠)

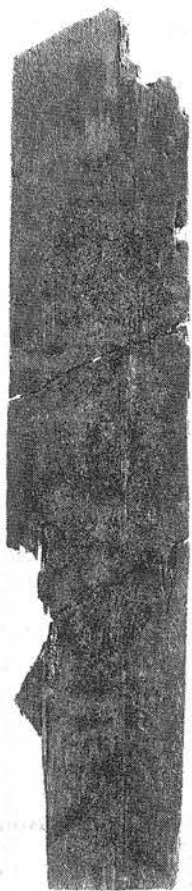
滋賀・鴨田遺跡 かもた

- 1 所在地 滋賀県長浜市大成亥町字東堂前
- 2 調査期間 一九九二年(平4)九月～十二月
- 3 発掘機関 滋賀県教育委員会・勉滋賀県文化財保護協会
- 4 調査担当者 吉田秀則・北村圭弘
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 一二世紀～一五世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(長 浜)

鴨田遺跡は姉川の形成した扇状地性沖積平野の扇端部やや外側に位置する。当地付近は建永元年(一二〇六)立荘の青蓮院門跡領坂田新荘推定地にあたり、総持寺文書などで高野辺としてあらわれる、旧称高鍋の大辰巳町の故地伝承地に近接



(北村圭弘)

する。木簡は、長浜新川改修工事に伴う第四次調査において、J区
の土坑状遺構から検出された。この遺構は復原径約一〇六cm、深さ
約二八cmである。隣接地には「堂前神社旧跡」碑がある。

8 木簡の积文・内容

(1) 「長州住 三十三所巡礼聖三人
宝徳四年」

長州住

214×44×5 061

この木簡は西国三十三所巡礼札で、左脇に宝徳四年(一四五二)の
年紀があり、現存するものとしては姫路市広峰神社の文安五年(一
四四八)例について、二番目に古い。また右脇には長州住(山口県)と
多くの札に見られるように、巡礼者の出身地を示すが、中央の文言
に巡礼聖と記される例はきわめて稀である。出土状況や破損状況等
から、札は故意に三つに折られて破棄された可能性が高い。北西約
一五kmの琵琶湖上には、三十番札所の竹生島宝蔵寺が存する。



(津西部・津東部)

三重・六大B遺跡

ろくだい

- 1 所在地 三重県津市大里窪田町
- 2 調査期間 一九九二年(平4)九月～十二月
- 3 発掘機関 三重県埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 小菅文裕・中村光司
- 5 遺跡の種類 集落跡・官衙跡か
- 6 遺跡の年代 弥生時代後期以降
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

六大B遺跡は、伊勢平野のほぼ中央部、津市街地から北北西へ約5kmの、志登茂川支流毛無川の左岸に位置する。丘陵を挟んで南方

4kmの安濃川流域には、弥生時代の拠点集落である納所遺跡がある。遺跡の立地は、毛無川に向かって緩く傾斜する沖積地で、標高七～一m前後を測り、付近一帯には水田が広がる。六大B遺跡の調査は、国道二三号バイパス・中勢道

路の建設に伴う緊急調査であり、一九八八年度は三重県教育委員会が、一九八九年度からは三重県埋蔵文化財センターが調査を実施している。

昨年度までの調査で、遺跡が南北三〇〇m以上の範囲に広がると、弥生時代以降の全時代にわたる複合遺跡であることなどが確認されている。主要な遺構として奈良～平安時代にわたる掘立柱建物群があり、大型掘立柱建物を中心とする建物群の配置には計画性が窺われる。全体的に遺物の出土量は多く、遺跡の性格を示す出土遺物として、多量の緑釉陶器、円面硯、和同開珎銀錢、石帯などがあげられる。

今回木簡が出土した遺構は、掘立柱建物群より西側の地区で、東西方向に走る幅約二m、深さ約四〇cmの溝である。遺跡の中心からやや西寄りに位置すると考えられる。相伴遺物には、高台をもつ須恵器杯、暗文の認められる土師器皿などがある。木簡のほか、この溝からは木製遺物の出土があったが、多くは自然木(枝等)である。溝の時期は、須恵器杯から判断して八世紀後半(奈良時代末)に比定でき、木簡もこの時期のものと考えられる。

出土した木簡は一点で、他には一三世紀後半の井戸から木簡状の木製品一点(〇三二型式)が出土している。

8 木簡の积文・内容

(1)

・「□□□□□□□□□□年十月七日□□^{〔神〕}前東人」

237×28×5 011

形態的には、短冊型で、赤外線テレビカメラによれば、表面の上端と下端近くに墨痕が認められるが、判読不能である。全体に火を受け、炭化している。裏面は下半部が判読可能であり、年月日と人名が読みとれる。内容は判然としないが、日付の下の人名は文書木簡の差出者と判断し、これを裏面と考えた。「十」の前には年号が、「年」の前には数字が入るものと思われ、数字に関しては「四」か「一」の可能性が高い。

本遺跡の所在する窪田の地は、平城宮跡出土木簡に「伊世国奄伎郡久菩多里」とみえる（『平城宮発掘調査出土木簡概報』一二）。律令制下における地方の下級官衙の存在を思わせる建物群の構成と、多量の遺物の出土に加え、木簡の出土は、本遺跡が官衙跡である可能性をより高める資料として注目される。

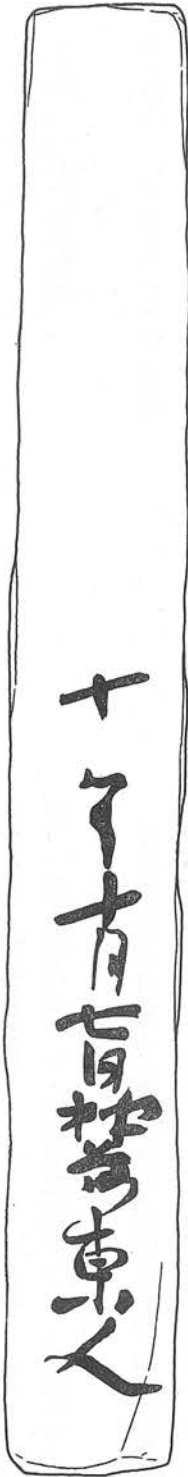
なお、木簡の釈読については、奈良国立文化財研究所の寺崎保広、

渡辺晃宏両氏にご教示を得た。

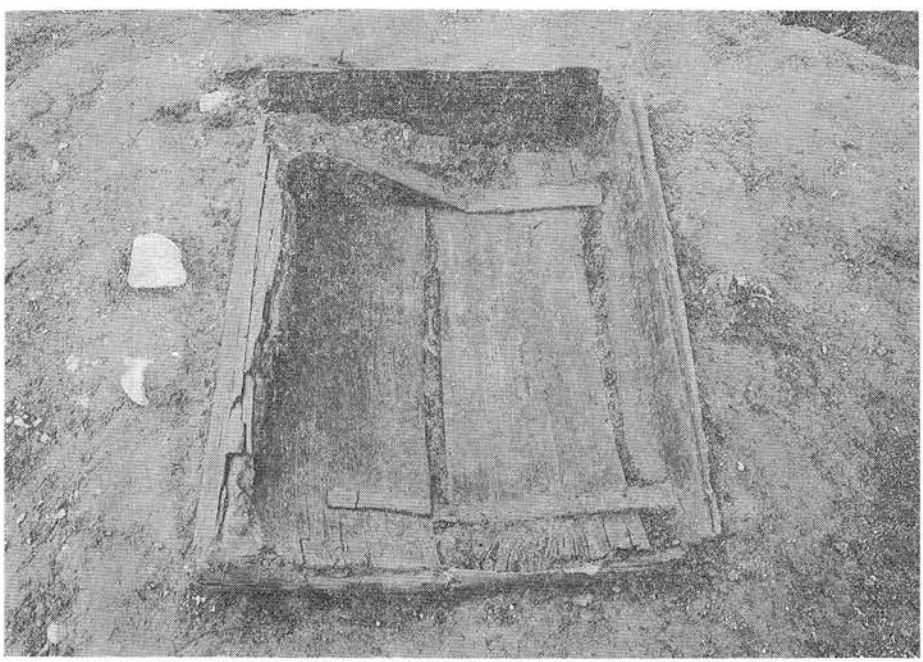
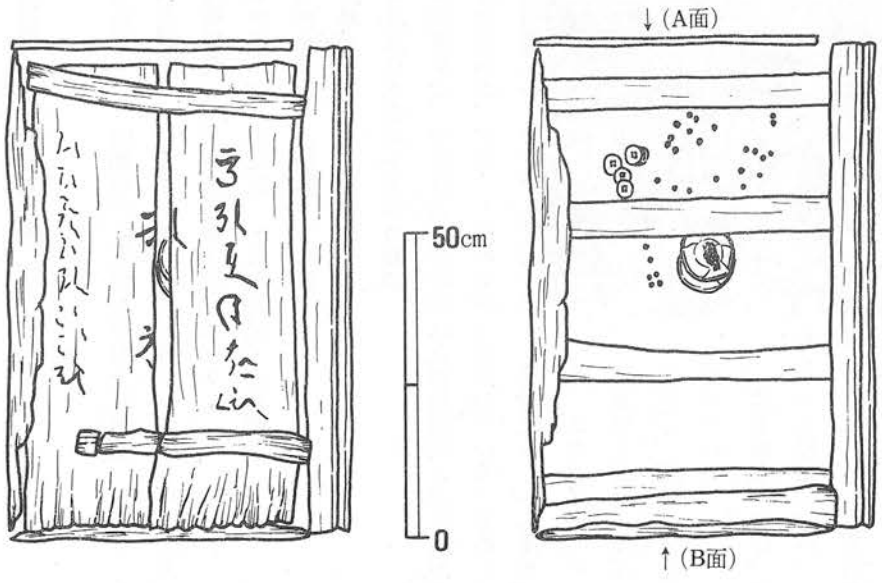
9 ^神 関係文献

三重県埋蔵文化財センター『一般国道二三号中勢道路 埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ（一九九一・一九九二・一九九三年）

（中村光司）



十一年十月七日前東人



1号木棺出土状況

(5) 「梵字」何処有南北 □□

394×39×2 051

(1)は一号木棺で、縦八〇cm、横五五cm、高さ二〇cmで、底に板を四枚敷いた後、側板をはめ込んだ構造になっており、砂礫層の土圧で蓋板が崩れ落ちていた。蓋板には梵字が、側板にも梵字・偈文が書かれ、稲穂をのせたかわらけ、古銭六枚、数珠が副葬されていた。また、二号木棺にも梵字・偈文が書かれていると思われるが、判読は不可能である。これら梵字・偈文は真言密教で用いられ、元興寺所蔵の『入棺作法』にも記されている。本遺跡の東側では、近在する法善寺の子院で、武田信玄の祈願寺であった福寿院の一部が調査されており、これらの寺院との関係が注目される。また溝は福寿院の寺域境を示すものである可能性が極めて大きく、信玄の影響のもとに、子院の中でも広大な寺域を誇っていたことが窺える。

二号木棺からは(2)~(5)の四点の呪符木簡が出土している。(3)(4)(5)には一号木棺の側板に書かれていたものと同じ偈文が書かれているのが読み取れる。したがって(2)には「迷故三界城」が書かれていたものと思われる。

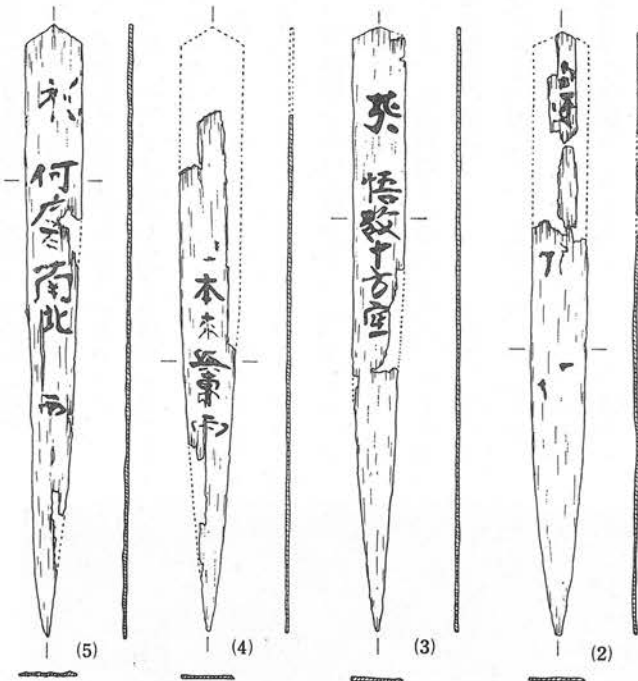
今回出土した資料は現在分析の途中であり、判読不可能な文字や解明されていない部分が多い。しかし今回のように中世の木棺がほぼ完全な状態で発見された例は全国的にも珍しく、中世の葬送儀礼の一端を垣間見ることができ貴重な資料である。

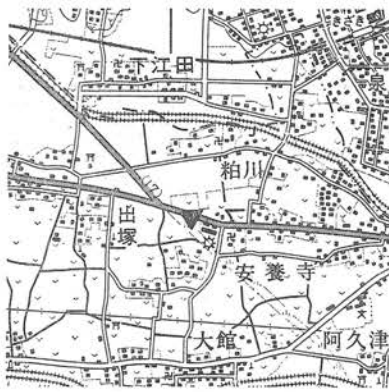
9 関係文献

藤澤典彦「元興寺所蔵葬送関係次第『入棺作法』」(『元興寺文化財研究』(財)元興寺文化財研究所通信四一 一九九二年)

五味信吾「福寿院について」(山梨県教育委員会『二本柳遺跡』一九九二年)

(小林健二)





(深谷)

遺跡の調査は上武道路
(国道一七号線、バイパス)建設
に伴うものであり、尾島町
内では一九八五年から一九

群馬・安養寺森西遺跡
あんようじもりにし

- 1 所在地 群馬県新田郡尾島町安養寺
- 2 調査期間 一九八八年(昭63)四月〜一〇月
- 3 発掘機関 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 4 調査担当者 飯田陽一・関根慎二・樋口伸男
- 5 遺跡の種類 集落跡・畑跡ほか
- 6 遺跡の年代 六世紀〜一九世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

安養寺森西遺跡は東武伊勢崎線太田駅の南西約八km、東流する利根川左岸の畑作地域に位置している。遺跡付近の地質および地形は、

台地形成層の上に利根川の
氾濫堆積物が厚く覆い、自
然堤防に似た低台地となっ
ている。付近の標高は三三
m前後である。

八八年まで、延長約一・三kmの範囲の全域で断続的に行なわれた。現状は道路となり、遺跡は湮滅している。
検出された遺構は時代・種類ともに多岐にわたるが、主なものは古墳時代の畑、奈良・平安時代の集落、中世館跡および中近世の井戸群などである。

井戸は総数一三基で、このうち木製品が出土したのは一九世紀前半の井戸である。「蘇民将来」の護符のほか、櫛、漆塗碗、曲物、井桁、果核などが出土している。肥前系磁器が多量に共存しており、これを年代推定の根拠とした。

一九九三年度の後半より整理作業に着手し、翌年度に報告書刊行の予定である。

8 木簡の积文・内容

- | | | | |
|-----|-------------|-----|--------------|
| (1) | ・「□民」 | (2) | ・「蘇民」 |
| | ・「□来」 | | ・「将来」 |
| | ・「之子」 | | ・「之子」 |
| | ・「孫也」 | | ・「孫也」 |
| | 33×8×10 061 | | 39×14×13 061 |

(3)

・「ッ」
 ・「みん」
 ・「志やう」
 ・「らい」
 ・「し」
 ・「そん」
 ・「□」
 ・「□」

29×21×20 061

(5)

・「□」
 ・「民」
 ・「□」
 ・「来」
 ・「子」
 ・「□」
 ・「乃」
 ・「□」
 ・「□」

31×24×24 061

(4)

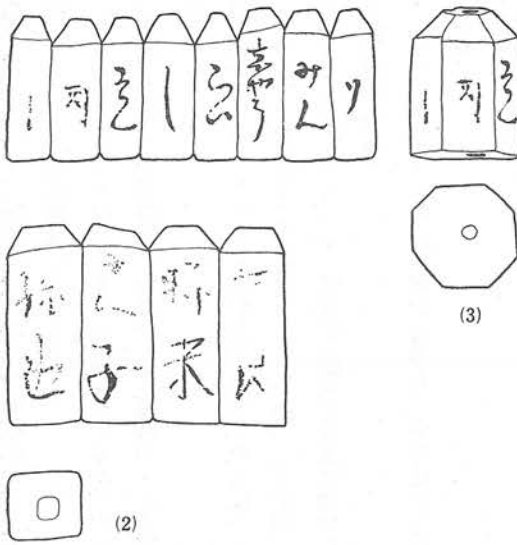
・「ソ」
 ・「ミン」
 ・「シヤウ」
 ・「ライ」
 ・「ノ」
 ・「子」
 ・「ソ」
 ・「ナリ」

25×16×16 061

(6)

・「□」
 ・「将」
 ・「来」
 ・「之」
 ・「子」
 ・「ソ」
 ・「ナリ」

29×17×16 061



9 関係文献

六本の護符が同一の井戸の下層から一括出土した。すべて材の中心を使用している。(1)(2)は四角柱、(3)は八角柱でいずれも上辺を尖らせている。(1)と(5)は中央に貫通した孔があり、棒状具を装着した痕跡が認められる。上下両面を除き周囲の全ての面に墨書がある。墨痕は比較的鮮明であったが、出土後の退色もあり判読は赤外線写真によるところが大きい。

（勸群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報八』(一九八九年)

(飯田陽二)

群馬・世良田諏訪下遺跡

1 所在地 群馬県新田郡尾島町世良田

2 調査期間 一九九一年(平3)一〇月～一九九三年六月

3 発掘機関 尾島第二工業団地埋蔵文化財発掘調査団

4 調査担当者 三浦京子

5 遺跡の種類 集落・墓・生産跡

6 遺跡の年代 五世紀～一九世紀

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

世良田諏訪下遺跡は大間々扇状地末端の低台地上に位置し、北側に石田川が東南流する。現状は起伏のない平坦な地形であり、水田や牛蒡などの畑作が行なわれている。調査は第二工業団地造成に伴う発掘調査で、調査面積は用地面積二五万㎡の内、緑地化される六七〇〇㎡を除いた面積である。



この地域は仁安三年(一一六八)に新田義重より義季に譲られた新田庄の郷の

一部と想定され、周辺には中世新田氏一族関係、近世徳川氏関連の遺跡が多い。西方一・五kmに総持寺、西南方一kmに長楽寺や世良田東照宮、〇・五kmには船田館跡・今井城跡などが存在する。また、西方には歌舞伎遺跡・三ツ木遺跡などの古墳時代から平安時代の集落跡や小角田古墳群などが存在する。当遺跡も世良田四十八塚として知られ、明治・大正時代にはまだ墳丘を残すものが多くあったというが、その後の開発による削平のため、調査に入った時点で調査地域内に墳丘を残すものは一基のみであった。発掘調査の結果は、帆立貝式古墳四基、円墳六七基と、予想以上の古墳群が検出され、円筒・形象埴輪など多くの貴重な資料が得られた。この他、古墳時代後期の竪穴住居五棟、平安時代の館跡及び竪穴住居一四棟、平安時代初期の洪水により埋没した水田跡・畑・用水堀などを検出している。中世以降では溝と土坑が多く、大半の溝が浅く直交するもので畑や水田などの地境と思われる。

木簡を出土した溝は、調査地域の南寄りに位置し、南西から北東方向へ一八六m流れ、途中で北に大きく屈曲し石田川へと向かうが、末端は氾濫原の中に消え不明瞭となる。南西側は調査区域外へ抜け、方向としては世良田の中心地へ向かっている。溝幅は四～七m、深さ一・六～二・二mを測り、全長二五三mを調査した。木簡は緩かな流水により流されたような状態で、ほぼ底面から五〇cm以内の堆積土中から検出されている。総数四三九点で、形態は大半が上端部

1992年出土の木簡

を圭頭状にし、左右両側に切り込みを一段から三段入れるものもあり、下端部は削り尖らせている。他に木皿二点、板草履七点、曲物の底板や折敷等の破片も出土している。しかし、土器・陶器類等の出土は少なく、常滑三筋壺・大甕・鉢、在地産と思われる鉢など僅かな破片が出土しているのみである。溝の年代を推定すると常滑三筋壺の口縁部形態、甕では口縁部の縁帯が幅広く「ㄣ」形状を呈していることや鉢の形態などから、常滑編年Ⅲ期後半と考えられる。明らかに他の時期と考えられるものは埴輪以外には無いため、この溝はほぼ一四世紀前半の所産として大過ないであろう。

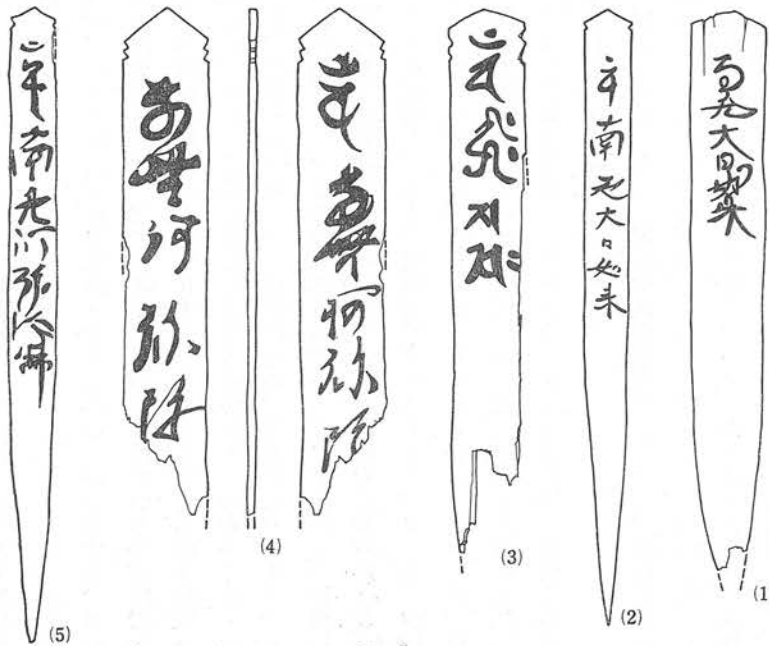
8 木簡の积文・内容

- (1) 「南无大日如来」 (245)×33×3 051
- (2) 「くき南无大日如来」 270×19×2 033
- (3) 「くき南无大日如来」 (238)×32×4 039
- (4) ・「くき南无阿弥陀×」
・「く南无阿弥陀×」 (222)×37×3 039
- (5) 「くき南无阿弥陀仏」 278×20×3 033

「南无大日如来」が最も多く、明瞭なものだけで五四点、部分的に判読できるものを入れれば大半がこれに属する。この内最初に梵

字(「大日如来」の種子)を付けるものが三二点見られる。他に「南无阿弥陀仏」が四点、梵字のみが書いてあるもの二二点である。

(三浦京子)



福島・小茶田遺跡
こちやえん



(平)

小茶田遺跡は、平の市街地東方約4km、夏井川下流右岸に位置する。太平洋の海岸より西へ約3kmのところであり、陸奥国磐城郡磐城郷に属する地域である。磐城郡衙に比定される根岸遺跡は、小茶田遺跡の南東方向約2kmの所に位置し、南西方向約五〇〇mの位置には、延喜式内社の大国魂神社が所在する。付札木簡の出土した荒田目条里制遺構は、本遺跡南側に隣接し

- 1 所在地 福島県いわき市平山崎字小茶田・馬場
- 2 調査期間 一九九〇年(平2)十一月(継統中)
- 3 発掘機関 (財)いわき市教育文化事業団
- 4 調査担当者 吉田生哉・猪狩みち子・佐藤勝比古
- 5 遺跡の種類 集落跡・水田跡
- 6 遺跡の年代 九世紀〜一八世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

ている『木簡研究』一三)。この地域には、海退過程に形成された浜堤が数列確認されており、現在の海岸線が形成されたのは、今から約一八〇〇年前とされている。遺跡は浜堤間に立地し、太平洋に向かって東に伸びる海岸段丘の開口部にあたる。現況は、夏井川に北面する田園地帯で、標高は三〜四m前後を測る。

小茶田遺跡の調査は、常磐バイパス道路工事に伴う発掘調査である。調査面積は、ほぼ南北に走る道路幅六〇m、長さ四五〇mにわたる路線内の約二万一九七二㎡である。

調査の結果、調査範囲の南側区域より古代から近世にかけての水田跡が数面確認された。遺跡の主要な部分は北側区域で、とくに西側寄りに建物跡が多数確認されている。現在のところ掘立柱建物二四棟、堅穴住居五二棟、井戸を含む土坑一八三基、溝三〇〇条などが検出されている。遺構の大半は、おおよそ九世紀から一〇世紀代に入るものと考えられる。

遺物の出土量は、整理用コンテナ約二六〇箱である。内訳は、土師器・須恵器が大半を占め、このほか、弥生土器、灰釉陶器・緑釉陶器をふくむ陶磁器、手捏ね土器・土錘・カラカマド、曲物・椀・桶などの木製品、鉄滓・刀子などの金属製品もある。

このうち、遺跡の性格を示す遺物は、木簡のほかに緑釉陶器五二点、灰釉陶器九三点、カラカマド二個体、風字硯一点である。墨書土器・刻書土器は、一六点出土しており、判読できるものに「十一」

「十二」「十三」「石木太」「厨」がある。

木簡は六点あり、いずれも井戸内からの出土である。うち五点は一三世紀後半～一四世紀『木簡研究』一四)のもので、今回報告する一点は、「大同元年」(八〇六)と墨書された木簡である。

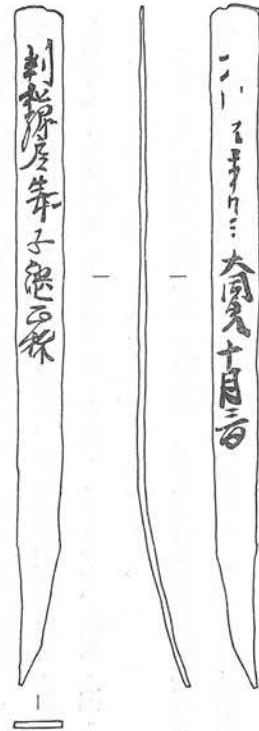
8 木簡の釈文・内容

(1) ・「判□郷戸主生子継正税

(削消) 大同元年九月□□日 『大同元年十月三日』
227×16×2 051

方形で隅柱をもち、長方形の割板を横位に重ねて側板とする井戸枠内より出土した木簡である。遺存状況がきわめて良好な完形品で、上端部が方頭状を呈し下端部を鋭く尖らせたものである。文字は表裏に記載され、墨痕は比較的鮮かである。表面には郷名(『和名類聚抄』に該当郷なし)十人名十「正税」と記され、裏面には年月日が記されている。裏面は一旦書いた年月日を削消し、改めて記載している。九世紀前半の正税に関わるきわめて貴重な史料となる。

本遺跡の隆盛期は、九世紀から一〇世紀であり、緑釉陶器や灰釉陶器・カラカマドの出土など、いわき市内においても特異な遺物群である。遺跡の性格は、磐城郡衙に比定される根岸遺跡など、周辺に所在する遺跡のあり方などを考慮に入れ、今後の調査成果をふま



えながら検討していかねければならない課題である。

なお、釈読にあたり、国立歴史民俗博物館の平川南氏のご教示を得た。

9 関係文献

「いわき市教育文化事業団「いわき市内発見の木簡」(『発掘ニュース』三八 一九九三年)

(吉田生哉)



(平)

跡が立地する丘陵間に形成された谷底平野に位置する。遺跡周辺は、一九八五年度より一九九三年度まで国道四九号線平バイパス改築工事に伴う発掘調査が断続的に行なわれ、その歴史的環境が明らかになりつつある地域である。これまでの

福島・番匠地遺跡

ばんしょうち

- 1 所在地 福島県いわき市内郷御殿町番匠地
- 2 調査期間 一九九一年(平3)～一九九二年
- 3 発掘機関 勸いわき市教育文化事業団
- 4 調査担当者 和深俊夫・矢島敬之・末永成清
- 5 遺跡の種類 水田跡・河川
- 6 遺跡の年代 縄文時代～中世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

番匠地遺跡は、いわき市街の南西約二・五km、阿武隈山系から太平洋に向かって延びる支丘陵(中世城館の久世原館が占地)と、清水遺

調査の成果として、久世原館丘陵からは古墳時代後期から平安時代にかけての多数の竪穴住居跡の検出と「磐□郡□」や「常」の印章型の出土、清水遺跡からは平安時代を主体とする竪穴住居跡や掘立柱建物群、精錬炉・鍛冶炉・木炭窯が検出され、これら製鉄関連遺構と磐城郡衙との関連性が注目されている。

番匠地遺跡では調査の結果、二枚の水田跡と縄文時代の自然河川が二条検出された。下層水田跡は弥生時代中期のもので、一九八七年に検出された水田遺構の大畦畔を一部補完する関係にある。上層水田跡は中世以降の所産であり、畦畔・溝・杭列等の施設が検出された。今回、木簡が出土した第一二号溝は、これら上・下水田遺構の中間層(標高一四・五m)で検出された。長さ約七〇m、幅約三m、深さ約〇・五mを測り、調査区の中央を南西から北東方向へ走る。

溝に伴う水田遺構は検出されなかったが、化学分析結果よりその存在は確実であり、溝は水田の用・排水施設と考えられる。溝内からの遺物の出土量は少なく、整理用コンテナ一箱ほどの土師器片、十数点の手捏ね土器、三点の土馬・蚕状土製品、斎串、刀状・天秤棒状の木製品、建築部材等が出土したにすぎない。文字資料は木簡二点のみである。

8 木簡の積文・内容

(1) 「永加羽

(345)×17×9 019

現状は下部が欠損しているが、かなりの長さを有した木簡と思われ、その上端部のみは物品名を記載した付札木簡と考えられる。類例として、金沢市西念・南新保遺跡出土木簡「須留女×」(二八五×二三×七)があげられる(金沢市教育委員会『金沢市西念・南新保遺跡Ⅱ』一九八九年)。内容については、物品が何を意味するのかが今のところ判然としない。時期もまた、第一二号溝内の出土遺物が古墳時代後期から平安時代の土器(主体は七世紀後半〜八世紀前半)を混在しているため特定することは困難である。木簡の内容とともに今後の検討課題としたい。

本遺跡は、縄文時代において自然河川が存在したのち、弥生時代中期には水田開発が行なわれ、以後ほぼ間断なく水田耕作域となっていたものと考えられる。前述のとおり、周辺丘陵には磐城郡衙との関連が注目される製鉄遺構・遺物が検出されており、今回の木簡出土の意義もこれら遺跡のもつ総合的な性格の中で検討していかなければならぬと考える。

積読にあたり、国立歴史民俗博物館の平川南氏のご教示を得た。

9 関係文献

働いわき市教育文化事業団「いわき市内発見の木簡」(『発掘ニュース』三八 一九九三年)

(矢島敬之)

秋田市教育委員会秋田城跡調査事務所編

『秋田城出土文字資料集Ⅱ』

秋田城跡調査事務所は一九八四年に『秋田城出土文字資料集Ⅰ』として、それまでに出土した漆紙文書と墨書土器の集成を刊行したが、今回それに続き、秋田城跡出土木簡と『Ⅰ』以後の漆紙文書をまとめた報告書を刊行した。

木簡は、一九八九・九〇年に行なわれた外郭東門付近の第五次調査を中心に三二一点が掲載され、漆紙文書とともに全点に写真と解説を付す。

『木簡研究』一・八・一二にも報告が掲載されたが、今回その全貌が明らかになった。

A4版 194頁、一九九二年三月刊

頒価 三〇〇〇円、送料 四五〇円

照会先 〇一一 秋田市寺内字大畑一一一

秋田城跡調査事務所

TEL〇一八八―四五―一八三七

川崎市市民ミュージアム編

『古代東国と木簡』の刊行

一九九〇年一〇月一〇日、川崎市市民ミュージアムで開催された木簡学会の公開研究会「フォーラム古代東国と木簡」の記録である。当日の基調報告と討論が活字化され、それに展示図録「木簡―古代からのメッセージ」掲載の四編の論考も転載されている。

A4版 二四〇頁 三五〇〇円

一九九三年四月 雄山閣出版刊

木簡研究 第二号

巻頭言

田中 琢

一九八九年出土の木簡

概要 平城京跡 平城京左京二条四坊十一坪 薬師寺 西大寺 藤原宮跡 藤原京跡 山田寺跡 上之宮遺跡 飛鳥京跡 長岡京跡(1) 長岡京跡(2) 長岡京跡(3) 平安京左京三条三坊十六町 平安京西市外町 平安京右京六条一坊十三町 平安京右京七条二坊十四町 久田美遺跡 大坂城跡(1) 大坂城跡(2) 大坂城跡(3) 上清滝遺跡 日置荘遺跡 上町遺跡 小曾根遺跡 森北町遺跡 但馬国分寺跡 砂入遺跡 嶋遺跡 山国・源ヶ坂遺跡 上滝野・宮ノ前遺跡 清洲城下町遺跡 川合遺跡八反田地区 多摩ニュータウン遺跡群(No.1-10七遺跡) 西河原森ノ内遺跡 木部遺跡 虫生遺跡 筑摩佃遺跡 国分境遺跡 門田条里制跡 胆沢城跡 秋田城跡 辻遺跡 寺前遺跡 天神山遺跡 百間川原尾島遺跡 草戸千軒町遺跡 周防国府跡

一九七七年以前出土の木簡(一二)

平城宮跡(第三五次)

森ノ内遺跡出土の木簡をめぐって

山尾幸久

木簡類による和名抄地名の考察

——日本語学のためから——

内資人考

工藤力男
春名宏昭

彙報

頒価 三八〇〇円 千五〇〇円

木簡研究 第一三号

巻頭言

笹山 晴生

一九九〇年出土の木簡

概要 平城京跡左京三条三坊十二坪 東大寺旧境内(三社池) 藤原宮跡 藤原京跡右京七条二坊 山田道跡 山田寺跡 長岡京跡 今里城跡 鳥羽離宮跡 壬生寺境内遺跡 里遺跡 大坂城跡 住友銅吹所跡 山之内遺跡 勝山遺跡 新金岡更池遺跡 豊嶋郡条里遺跡 五反島遺跡 上小名田遺跡 吉田南遺跡 明石城武家屋敷跡 今宿丁田遺跡 袴狹遺跡 伊賀国府推定地 瀬名遺跡 忍城跡 市原条里制遺跡 鉢形地区条里遺跡 石田三宅遺跡 斗西遺跡 一乗谷朝倉氏遺跡 浄水寺跡 上荒屋遺跡 田中遺跡 八幡林遺跡 緒立C遺跡 的場遺跡 荒田目条里制遺構 柳之御所跡 矢野遺跡 岡山城二之丸跡 草戸千軒町遺跡 長登銅山跡 東山崎・水田遺跡 鴻臚館跡 大宰府跡 観世音寺跡 多田遺跡 上高橋高田遺跡

一九七七年以前出土の木簡(一三)

飛鳥京跡 県立明日香養護学校遺跡 大坂城跡

下曾我遺跡と出土木簡

鈴木 靖民

香川県長福寺出土の木簡

館野 和己

「二条大路木簡」と古代の食料品貢進制度

樋口 知志

中国簡牘学国際学術研討会参加記

佐藤 信

彙報

頒価 四三〇〇円 千五〇〇円

漢簡研究国際シンポジウム 開催さる

去る一九九二年二月一二・一三の両日、関西大学において同大学東西学術研究所主催の「漢簡研究国際シンポジウム九二」が開催された。中国・台湾で漢簡研究に携わる九名の報告をもとにして、東洋史・日本史・書道史等の分野の研究者による活発な討論が展開された。

報告は以下のとおり。

徐萃芳「中国における漢簡発掘の現状」、初世賓「居延新簡の歴史研究に対する貢献」、岳邦湖「エチナ川流域漢代遺跡の現状」、邢義田「中央研究院歴史語言研究所所蔵居延漢簡整理工作簡報」、吳祜驥「敦煌馬圈湾出土漢簡の特色」、何双全「漢簡中の符伝と過所」、李永良「敦煌漢簡中の西域史料の問題について」、彭浩「湖北省江陵出土漢簡概説」、李学勤「湖北省江陵張家山出土漢律竹簡」

木簡研究 第一四号

巻頭言

一九九一年出土の木簡

八木 充

- 概要 平城宮跡 平城京左京二条二坊坊間路西側溝 平城京東市跡
 推定地 唐招提寺 藤原京跡 飛鳥池遺跡 四条遺跡 長岡京跡1
 長岡京跡2 長岡京跡3 遠所遺跡 木津川河床遺跡 大坂城跡
 住友鋼吹所跡 桑津遺跡 竜華寺跡 高槻城跡 堺環濠都市遺跡
 屏風遺跡 長田神社境内遺跡 宅原遺跡 袴狭遺跡1 袴狭遺跡2
 (旧坪井遺跡) 光明寺遺跡 西河原森ノ内遺跡 西河原遺跡 湯ノ
 部遺跡 石川条里遺跡 内匠日向周地遺跡 小茶円遺跡 富沢遺跡
 多賀城跡 円福寺遺跡 田道町遺跡C地点 上荒屋遺跡 山田郷内
 遺跡 稻城遺跡 吉野口(鯉山小)遺跡 三日市遺跡 長登銅山跡
 空港跡地遺跡(第3工区) 雀居遺跡 興善町遺跡
 一九七七年以前出土の木簡(一四)
 平城宮跡(第五〇・五一・五二・六三次) 上田部遺跡
 郡家今城遺跡 郡家川西遺跡 じょうべのみ遺跡 高瀬遺跡
 考古資料としての古代木簡
 八幡林遺跡等新潟県出土の木簡
 木上と片岡
 下級国司の任用と交通―二条大路木簡を手がかりに―
 「敦煌漢簡」研究の現状と課題
 桑報

頒価 四五〇〇円 千五〇〇円

山中 章
 小林 昌二
 岩本 次郎
 鈴木 景二
 吉村 昌之

木簡研究 第4号

1982年11月刊 頒価 3500円

巻頭言 一木簡保存法の思い出—
1981年出土の木簡
1977年以前出土の木簡(4)
呪符木簡の系譜
木簡と上代文学 一水産物付札をめぐって—
「漆紙文書」出土概要

坪井清足
和田萃
小谷博泰
佐藤宗諄

木簡研究 第5号

1983年11月刊 頒価 3500円

巻頭言 一木簡史の研究について—
1982年出土の木簡
1977年以前出土の木簡(5)
字訓史資料としての平城宮木簡
一古事記の用字法との比較を方法として—
平城宮出土の衛土関係木簡について
木簡とコンピュータ
書評『草戸千軒—木簡1—』

関晃
小林芳規
鬼頭清明
田中琢
水藤真

木簡研究 第6号

1984年11月刊 頒価 3500円

巻頭言 一記紀批判と木簡—
1983年出土の木簡
1977年以前出土の木簡(6)
平安時代の日記にみえる木簡
日本古代の人口
『木簡研究』1～5号総目次

直木孝次郎
山田英雄
鎌田元一

木簡研究 第7号

1985年11月刊 頒価 3800円

巻頭言 一刀筆の吏—
1984年出土の木簡
1977年以前出土の木簡(7)
公式様文書と文書木簡
中国における最近の漢簡研究
英国出土のローマ木簡
木簡史料紹介—牛札—

土田直鎮
早川庄八
大庭脩
田中琢
石上英一

木簡研究 第8号

1986年11月刊 頒価 3800円

巻頭言 一最後まで残る仕事—
1985年出土の木簡
1977年以前出土の木簡(8)
中国簡牘研究の新動向
中国簡牘研究の新しい動向
倉札・札家考
柚井遺跡出土木簡の再検討
出土の文字資料からみた中世民衆生活の一面
—草戸千軒町遺跡を中心に—

青木和夫
李学勤
菅谷文則
原秀三郎
栄原永遠男
志田原重人

創刊号～3号 品切れ

送料 1冊500円, 2冊600円, 3冊700円, 4冊800円, 5～10冊1500円

彙報

第一四回総会および研究集会

木簡学会第一四回総会と研究集会是、一九九二年二月五、六日の両日、奈良国立文化財研究所平城宮跡資料館講堂において、会員約一七〇名が参加して開催された。会場には、平城宮第二二次・二三〇次、平城京左京三条三坊三坪、同右京三条三坊三坪、藤原宮六九一四次・七〇次、藤原京右京五条四坊、遠所遺跡の木簡のほか、研究集会の加藤報告に関連して、下野国府跡、但馬国府推定地出土の木簡が展示された。

◇二月五日（土）（午後一時～五時）

第一四回総会（議長 水野柳太郎氏）

開会の挨拶で狩野久会長から、会員問題のための検討小委員会を設けて佐藤宗諱氏に委員長を依頼したが、会員各位も委員に意見を寄せられた旨が述べられた。また、逝去された鈴木一男氏への哀悼の意が表せられた。続いて、議長に水野柳太郎氏を選出して議事に入った。

会務報告（館野和己委員）

会員新入会はこの一年ストップしたが、逝去一名、退会二名で現在二九一名であること、会員問題を中心に今後の会のあり方を検討する小委員会を設けたこと（委員長佐藤宗諱、委員鬼頭清明、和田萃、清水みき、館野和己、寺崎保広）、『木簡研究』の定期講読料支払いを銀行振込に一本化したこと、等の報告があった。

編集報告（和田萃委員）

『木簡研究』一四号の編集経過について説明があり、一三号よりも本文約三〇頁の増となり、その他の経費増加もあって、委員会で協議した結果、会誌代を四五〇〇円とする旨の報告があった。また、今後の編集体制についても検討の時期にきていることが述べられた。

会計・監査報告（館野和己委員・八木充監事）

会計担当の綾村委員の海外出張により、館野委員から一九九一年度の会計報告が行なわれた。引き続き八木監事から、会計が適正に行なわれている旨報告があった。その後、館野委員から一九九三年度の予算案につき説明がなされた。

以上の案件について、異議なく了承された。

役員改選について

次期（一九九三・九四年度）委員及び監事について、石上英一氏より推挙があり、拍手により承認された（一九八頁参照）。

研究集会（司会 平川南氏）

国・郡の行政と木簡―「国府跡」出土木簡の検討を中心として―

加藤友康氏

加藤氏の報告は、下野国府跡出土木簡を中心として、国衙(郡衙)の機構や政務・財政・儀礼体系を復原するものであり、下野国府跡の調査にあたった田熊清彦氏から遺構についての補足報告があった。加藤氏の報告内容は本号に掲載できた。

研究会の終了後、同会場で懇親会が行われた。

◇二月六日(日)(午前九時～午後三時)

研究会(司会 笹山晴生氏・栄原永遠男氏)

一九九二年全国出土の木簡

森 公章氏

平城宮跡第二二次出土木簡

館野和巳氏

藤原京右京五条四坊出土木簡

竹田政敬氏・和田 萃氏

森氏の報告は、一九九二年に全国で出土した五二の遺跡の概要と木簡の内容を説明したものであるが、その多くは本号に掲載できた。館野氏の報告は、木簡の内容などから遺構の性格として式部省・神祇官との関係が論じられた。竹田・和田両氏の報告は、下ッ道東側溝を中心とする遺構とそこから出土した木簡について、特に祭祀との関係に注目して説明された。

午後の討論では、二日間の報告に関して活発な質疑応答がなされた。最後に鬼頭清明委員から閉会の挨拶があった。

委員会報告

◇一九九二年一月五日(土)

於奈良国立文化財研究所

総会に先だって、会務報告、『木簡研究』第一四号の編集報告と頒価、一九九三年度予算案、総会・研究会の運営について検討が行なわれた。また編集・事務体制の整備について意見がかわされた。

◇一九九三年六月二日(水)

於奈良国立文化財研究所

会務に関しては幹事の補充(今津勝紀氏)、会計については一九九二年度決算報告及び監査報告、編集については『木簡研究』第一五号の編集計画について報告がなされ、それぞれ承認された。次に第一五回総会・研究会の日程・報告内容について検討を行なった。また、会員問題等に関する検討小委員会での議論の経過について報告があり、それをめぐって種々意見の交換がなされた。

◇一〇月二八日(木)

於奈良国立文化財研究所

会務報告・会計中間報告、『木簡研究』一五号の編集状況についての各報告があり、第一五回総会・研究会の日程・内容等について検討を行なった。また、会員問題について、小委員会の提案をもとに議論が交わされた。

木簡学会役員（一九九三・九四年度）

会長	狩野 久		
副会長	早川 庄八	町田 章	
委員	綾村 宏	石上 英一	鎌田 元一
	鬼頭 清明	柴原永遠男	佐藤 宗諱
	館野 和己	東野 治之	永田 英正
	原 秀三郎	平川 南	松下 正司
	山中 敏史	吉田 孝	和田 萃
監事	笹山 晴生	八木 充	
	今津 勝紀	榎木 謙周	鷺森 浩幸
	清水 みぎ	鈴木 景二	寺崎 保広
	土橋 誠	西山 良平	橋本 義則
	森 公章	吉川 真司	渡辺 晃宏

PROCEEDINGS OF JAPANESE SOCIETY
FOR THE STUDY
OF WOODEN DOCUMENTS

NO. 15 1993

CONTENTS

Foreword	HAYAKAWA Shōhachi.....	i
Wooden Tablets Excavated in 1993		1
Outline		
Explanatory Note		
Nara Capital Site, Nara Prefecture ; Remains of Nara Capital Eastern 3rd Wrd on 3rd Street, Nara Prefecture ; Remains of Nara Capital Western 2nd War on 3rd Street, Nara Prefecture ; Fujiwara Palace Site, Nara Prefecture ; Remains of Fujiwara Capital Western 4th Wrd on 5th Street, Nara Pre- fecture ; Remains of Fujiwara Capital Western 4th Wrd on 5th Street, Nara Prefecture ; Remains of Tangiri, Nara Prefecture ; Nagaoka Capital Site, Kyōto Prefecture ; Nijōjō Castle Site, Kyōto Prefecture ; Toba Palace Site, Kyōto Prefecture ; Remains of Nakakaidō, Kyōto Prefecture ; Shōryūji Castle Site, Kyōto Prefecture ; Ōsaka Castle Site, Ōsaka Prefecture ; Ōsaka Castle Town Site, Ōsaka Prefecture ; Remains of Kire-Higashi, Ōsaka Prefecture ; Hirano Town Site, Ōsaka Prefecture ; Remains of Uetsuke, Ōsaka Pre- fecture ; Remains of Hakaza, Hyōgo Prefecture ; Remains of Kamota, Shiga Prefecture ; Remains of Rokudai-B, Mie Prefecture ; Anyōji Temple Site, Mie Prefecture ; Remains of Miyanonishi, Mie Prefecture ; Akahori Castle Site, Mie Prefecture ; Remains of Kajiko, Shizuoka Prefecture ; Remains of Nihonyanagi, Yamanashi Prefecture ; Remains of Ninomiya-Miyahigashi, Gunma Prefecture ; Remains of Anyōji-Morinishi, Gunma Prefecture ; Remains of Serada-Suwashita, Gunma Prefecture ; Remains of Kochaen,		

Fukushima Prefecture; Remains of Banshōchi, Fukushima Prefecture; Zuiganji Temple Site, Miyagi Prefecture; Remains of Hachimanbayashi, Niigata Prefecture; Remains of Ayanomae, Niigata Prefecture; Remains of Banba-Tenjingoshi, Niigata Prefecture; Remains of Inui, Ishikawa Pre- fecture; Remains of Miyanaga-Hojikawa, Ishikawa Prefecture; Remains of Kitatakagi, Toyama Prefecture; Remains of Yamasaki, Hiroshima Pre- fecture; Remains of Nakasimada, Tokushima Prefecture; Remains of Kumekubota-Morimoto, Ehime Prefecture; Kanzeonji Temple Site, Fukuoka Prefecture; Remains of Wakidō, Fukuoka Prefecture; Remains of Jōbaru- Minami, Saga Prefecture; Proposed Site of Tsumakita-Elementary School, Miyazaki Prefecture	
Wooden Tablets Excavated before 1977 (15)	133
Ruins of Land Lord Asakura in Ichijōdani, Fukui Prefecture; Kusado- Sengenchō Site, Hiroshima Prefecture; Nagaoka Palace Site (31st, 32nd Excavation), Kyōto Prefecture	
Wooden Tablets and the Administration of Kuni (国) and Gun (郡)	KATO Tomoyasu..... 145
Wooden Tablets Discoverd in the granary in Kanoseyama, Kyōto Prefecture	TANAKA Jyunichirō..... 181
Bibliography No. 11—No. 15	

Published by
JAPANESE SOCIETY
FOR THE STUDY OF WOODEN DOCUMENTS

一九九三年十一月二十日 印刷
一九九三年十一月二十五日 発行

〒630 奈良市二条町二丁目九番一号
奈良国立文化財研究所

編集発行

木

綾村 宏
簡学 会

会長 狩野 久

TEL (074) 3413931
振替口座 京都 〇一五二七

京都市下京区油小路仏光寺上ル

印刷

眞

陽

社

TEL (075) 35116034

ISSN 0912-2060

